1傾いてしまった木を切る山本作一さん **2**エコクラブの会員が手を加える前の公園。まるでジャングルのよう。既存の歩道すら見えない **3**エコパークは湿地帯で水はけが悪かった。改善するために、ビニールシートで水の通り道を確保し、その上に材木業者で不要になったウッドチップと砕石を敷き詰めた **4**草木を刈り、軽トラックへ積み込む会員。今では、ヤシの木道路から公園内の様子が分かるほど整備された

ジャングルを人が憩える公園へ

御前崎港の一画に、住民の憩いの場所「御前崎港緑地帯（エコパーク）」は設けられている。敷地の広さは約2・5ヘクタール。実に、サッカーコート3面分以上だ。本来ここは自然があふれ、人の手で管理され、人々が気軽に立ち寄れる場所となるはずだった。しかし、その広さ故に管理が行き届かず、荒れるに任せた状態になっていた。それが10年以上前の話だ。

御前崎エコクラブ発起人の小澤慶司さんは、当時を振り返ってこう話す。

「エコパークは、基本的に県で管理していましたが、地元女岩区でも草刈りをしていたんです。でも、月に何回かの作業ではらちが明かず、そのうち、参加者も減っていったと聞きました。荒れてしまったこの土地には、セイタカアワダチソウが、まるで森のように生い茂っていました。エコパークの横を車で通過しても中の様子は見えず、風も抜けないため、一年中どんよりとしていて、恐る恐る歩くような公園だったんです」

そこで、整備に乗り出したのがエコクラブだ。エコクラブは、環境保全の必要性を切に感じていた小澤さんが「子どもたちや御前崎の未来を守りたい」と平成10年に発足させた団体である。

同クラブ会員には、旧御前崎町のまちづくり委員を兼ねていた人が大勢いた。ある時、まちづくり探検隊でエコパークを視察し、ひどく荒れ果てた様子を目にする。その惨状に心を痛めた会員は、ここを再生させようと話し合った。

「自分たちに何かできることはないかと、みんな感じていました。検討の末、干からびた池をビオトープ※の池によみがえらせようと決めました。ビオトープを勉強するために、牧之原市へも視察に出掛けました。ビオトープが完成し、初めて子どもたちが遊びに来てくれた時は、本当にうれしかったですね」

しかし、ある時小澤さんは、いまだ公園全体がうっそうとした草木で覆われていることに気が付いた。同クラブ会員の山本貴美枝さん（後の同クラブ会長）に相談を持ち掛けた。山本さんは「せっかく子どもたちが遊びに来てくれる公園になったんだから、もっといい場所にしよう」と応え、二人の意見が一致。他の会員も賛同し、公園全体の整備が始まった。

草刈り、木の伐採に始まり、合間を見ては花を植えていった。雨風を凌げる場所がほしいと、会員の手で休憩所を改装した。そんな地道な活動を10年以上続けた結果、ザリガニを捕まえたり、ドングリ拾いを楽しんだりする子どもや、花を見ては、顔をほころばせる大人たちを見かける公園へと生まれ変わった。

小澤さんは「みんなの思いが一つになって、魅力あふれる公園に生まれ変わりました。人が憩い、たくさんの笑い声が聞こえる公園になりました」と目を細めながら話した。

※ビオトープ…生き物が住み着くことができる場所

エコパークを
笑顔あふれる場所にしたかったんです

御前崎エコクラブ事務局長
小澤慶司（おざわけいじ）さん（下岬区）